

Title	Principles of Economics By F. W. Taussig.
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.1 (1912. 1) ,p.186- 188
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19120100-0186">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19120100-0186</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

ある一事である。現代の社會制度の下に産業上の平和を確立するに當り之が最も強大なる障害として見る可きものは集産主義の影響である。集産主義は既に業に幾多の點に於て團體的契約に實行に危害を與へて来た。Syndicalism と集産主義とは一個共同の利害に依つて連絡せしめられてゐる。労働組合の集産主義化はとりも直さず Syndicalism の傳播を未知の間に助けつゝあるものである。恐らくは何人と雖も此國に於ける資本對労働の前途を絶對に樂觀することは出来ぬと思ふ。古い英國が壞れて新しい英國が出来つゝある間には更に幾多の波瀾を生ずることと思ふ。最も堅實なりと稱せられる此國の輿論は果して何時まで、如何なる程度まで政府を援けて其國家社會主義的政策、更に手厳しく云へば集産主義的政策を行はしむるのであらう。觀し來れば此國の社會上政治上の前途程興味のあるものはない。

吾人は吾國の讀者が此小冊子に籍つて必ず多大の感服を惹起せらるゝことを信じて一言紹介の詞を述べた次第である。(在英國高橋誠一郎)

Principles of Economics. By H. W. Taussig.

New York, the Macmillan Company, 1911.

上下二卷(大判) 上卷五百四十七頁 下卷五百七十三頁 東京實價八圓(上下)

本書はハーバード大學教授にして米國關稅史家として其右に出ずる者なきタウシグ氏の最新の著書なり。著者が序文に告白する所に據れば本書の目的は相當の學識と理解力とを有する者にして未だ曾て秩序的に經濟學の研究を爲したることなき讀者に了解し易き様に其原理を説明するにあり。従つて定義、研究方法、學史等には重きを置かず、教科書と云ふよりは寧ろ百科全書的に初歩經濟學の殆んど全般に亘り出來得る限り通俗の説明を與へたり。上卷の載する所は第一編「生産」、第二編「交換」、第三編「貨幣及銀行」、第四編「貿易」にして下卷は第五編「富の分配」、第六編「労働問題」、第七編「經濟的組織」及第八編「租稅」を論じたり。

吾人は上下千百餘頁の大著述に載せたる諸説を一々紹介するの餘白を有せず、又紹介するの必要も非ざれども、各編に於て本書の特徴と看做すべきもの一二を擧ぐれば、第一編「生産」論に於て著者は労働を用ひずして得たる水と労働を用ひて得たる水とを比較して經濟學の性質を巧妙に説明し、稀有を以て經濟財の特徴とせり。又「生産」を廣義に解して、欲望の満足と與ふる労働は總て皆是れ生産なりと論ず。次に「資本」は生産的資本と享樂的資本とに大別することを得るも習慣に従ひ「資本」を生産に用ゐる財貨のみに適用するを可とするが如し。第二編「交換」論にて著者は靜的社會に於てのみ財貨の價値は其生産費に依りて定まるものなりと主張し普通の場合には價値は限界効用に依りて定まるものなりと説け

批評と紹介

り本編は他の各編と異り其載する所の議論は通俗的と云ふよりは寧ろ教科書的なり。第三編「貨幣及銀行」中著者は貨幣數量説を主張す。又紙幣亂發の弊害を説明し頗る見るに足るべきものあり。此一節は我國の現狀に適せり。第四編「貿易」の部に於て著者は自由貿易論を唱へて倦む所を知らざるが如し。本編に於て著者は貿易の學理を根本的に且つ最も簡單明瞭に記述せられたり。第五編「富の分配」にて利子論はミル、マーシャル、ペンバエルク及フィッシャーの利子論の調和を試めるが如し。資本論に關してはフィッシャーの學説を紹介せるも實利主義 (Pragmatism) の立場よりして之を排斥せり。賃銀に就きては自論の基金説に重きを置かずしてハドレー説を基礎となし賃銀は労働の限界の生産額より利息を差引けるも (discounted marginal product of labor) とせり。第六編「労働問題」にては労働保險は強制的に施行せば最も多く其効果を收め得べしと論ぜざるは注意すべき點ならん。第七編「經濟的組織」を論ずる中に市營、官營の成功不成功は政治機關の完備せると否とに且つ人民の智識發達せると否とに依るものなりと説かれたり。

著書は本書の目的を以て通俗的に經濟學を講義するにありとせど、惟ふに著者衷心の抱負は是れに非ず。アダム・スミスの富國論が十八世紀の末葉に至る迄の經濟學の進歩を代表し、ミルの原論が十九世紀中葉迄の古典派經濟學の完成を期し、マーシャルの原論が千八百八十年迄の各學派の研究と主張との調和を計りたる

に倣ひ、本書はマーシャル以來の新事實を擧げ新研究を紹介し新學説を調和せしめんと務めたるに非ざるや。

本書は骨子をミルの原論に取り、マーシャルを以て筋肉と爲し、マーシャル以後の研究を以て皮膚と爲し衣裳とせるが如し。本書所論の順序は大體に於て古典派に従ひ生産、交換、富の分配等の順序なり。又價値を論ずるに當りて猶ほ生産費説に繼々とし、貨幣數量説を擧ぐるに及んでミルを回想し、貿易の學理を説明するに至りて又ミルを追懷せり。次に價値論、生産論はマーシャルに負ふ所多し。マーシャル以後の研究にして著者が枚擧し、批評を加へ若しくは意識的又は無意識的に採用せる主なるものは原理としてはペンバエルク、クラーク、セリグマン、ハドレー、フェタ、カーパー、フィッシャー等の學説にして、實際問題及其新研究としてはフィッシャーの物價及利率に關する研究、ワグナー、セリグマン等の租稅論、トラスト、カルテル制御政策、宅地々價及地代、貧富の懸隔に關する諸學者の新研究、労働保險等なり。

著者は米國經濟學者間に達筆を以て有名なる程なれば本書の文章も平易流暢にして難晦の字句を避けたるを以て些の滯滞する所を知らず。本書の如く闡明に經濟の學理を説明したるものは英米の著書には稀に見る所なり。然れども若し本書の缺點を擧げんか學理の説明往々冗長に失し簡明を缺き、マーシャルに倣ひ餘り多くの學説の調和を計らんと努めたる結果、讀者をして著者が孰れ

批評と紹介

を以て真理とせるかを知るに苦まじむる所一二にして足らざる。又  
缺點と云ふには非れど、日本の讀者の立場よりすれば本書は論文  
體を用ひずして講演體を用ひ時としては會話體を採れるを以て英  
語に堪能ならざる讀者には反つて解し難き所多からん。本書は又  
脱字跡からず。

若し本書を以て本書の模範書とも謂ふべきスミス、ミル、マーシ  
ヤルの著書と比較せば、本書は獨創の點に於て將又哲學的基礎に  
於てスミス及マーシヤルに遠く及ばざると同時に兩の哲學的思  
想の弱點を有せず。又ミルの銳利の觀察と筆法とを缺くと同時に  
ミルの獨斷的傾向を避けたり。又各其當時の經濟學研究を網羅せ  
る點に於て、スミスが自由貿易と放任主義とを過重視し、ミルが  
歴史的研究を輕視し、マーシヤルが單に經濟學の一部を論じたる  
に反し、本書が經濟原論の全體に亘り重なる學說と研究とを紹介  
せるは本書の成功と見るべし。

要するに本書は貿易に關する一節を除きては何等の新たに學界  
に貢獻する所なく、又讀者の思想を刺戟するに足るものなけれど、  
全般に亘りて經濟學最新の進歩を代表せるものとしては本書を置  
きて他に無からん。本書は米國人向に著述せしものなりと雖も苟  
くも經濟學を専攻せるものは米國人、日本人たるを問はず一讀せ  
ざるべからず。(高城)

# 三田學會雜誌

號二第年五十四治明

次目 號二第 卷六第

## 介紹評批

- 堀江教授著「中央銀行と金融市場」
- フィッシャー原著河上學士評釋「資本及利子歩合」
- デー原著三上氏譯述「世界商業史」
- 廣中法學士著「獨逸殖民新論」
- フィリップス原著 經濟政策後篇(下卷)
- 氣賀教授解說

## 雜錄

- 主觀的價值論沿革の一節 變應義塾 大學講師 小泉信三
- 我國上中古に於ける都府の發達 文學士 松本彦次郎
- 物價の變動と當座預金 高城仙次郎

## 論說

- 効用遞減の法則成立の根據 法學士 河上肇
- 犠牲の研究 變應義塾 教授 板倉卓造
- 伊土戰爭と國際法 法學博士 河津暹
- 取引所制度の改善につきて 法學博士 河津暹
- 白河樂翁公の「物價論」を評す ドクトルオプ フキロソフネイ 高城仙次郎